

ー親と教師はいじめにどう立ち向かうかー

いじめ問題に関するシンポジウム 135人の参加で討論

NPO法人・地域人権みんなの会が主催し、岡山市教育委員会、岡山県人権連などが後援した、いじめ問題に関するシンポジウムが8月30日に岡山市内の「きらめきプラザ」で開かれ、教師、保護者など135人が参加しました。

主催者を代表して中島純男氏は、「企画のうえでNPOおかやま人権研究センターに多大な協力をいただいた。参加されたみなさんの思いを存分に出し合っていじめ問題を深めてください」とあいさつ。



シンポは、フリースペースあかね代表の徳方宏治さん、子育て・教育なんでも相談ネット世話人代表の難波一夫さん、沢田の杖塾主宰の森口章さん、岡山大学名誉教授の岩間一雄さんの4人が、いじめをうけた子どもたちや保護者、教師の立場にたって、それぞれ報告されました。

会場から、参加者8人が発言。全教職員の目線で一人ひとりの子どもたちに注視し、いろんな角度から実態をつかむ努力をされている学校現場、良い子でいることを演じ続けることのしんどさを訴える生徒の現状、いじ

めを受けた子どもの母親のお二人も体験、などが話し合われました。

最後に、4人のパネラーは、集団でのとりくみで本当に楽しいこと、連帯、友情など体験することがいじめをなくすことにつながる、子どもを真ん中に置いて保護者と教師が手をつなぐとりくみを、心を開く場を教師も子どもも必要である、「自分のため、世の中、人のため」をバランスをもって取り組むことの重要性、などを強調しました。回収された55通のアンケートには、再び開催してほしいという要望も数多くありました。

会場からの発言 ① 一うえからの格付けに流されないで、とりくみますー

岡山市内の南部の小さな小学校に勤めております。今日は徳方さん、難波さん、森口さん、岩間さん、それぞれのかたがお話されている話を聞いていると「あの時のあの子はどうか...」「あの同僚の子はどうか...」という、そういうことを思い出しました。ここまでよみがえった子どもも私の身近なところでもひとりおります。これは学校がどうこうというより、そこのお父さんやお母さんがほんとうにしっかり支えてくれたんだなと思います。私自身の授業の時も、授業の途中で他の子どもたちの冷たい目とか冷やかし目とかちょっとしたことで、ことばですごく動揺して窓から「飛び降りる」と言って窓にしがみついたりする場面も経験しました。小学校の6年ぐらいときにお家の人が連れて行って、そこでとてもすてきな出会いがあ

ったんだと思います。詳しいことはよくわかりませんが、その後、中学生になってからちよくちよく小学校の方にとってもおだやかなとても優しい表情で何度も話にきてくれたりするし、いろんな運動会が終わった後の片づけなんかも保護者の方と一緒に手伝ってくれたりとか、とってもビックリするほどの変わりようでした。そういうお話も先ほどのお話を聞いていて、あの子のことを思い出していました。そういうことはどちらかというにつらい気持ちのよみがえりが多いですね。うまくできたというより、もっとできたのではないかということの方が多くですね。ただ、森口先生のお話を聞きながら、私の気持ちのいろんな事を代弁して下さってほんとうに嬉しく思いました。文科省は学力テストの結果を公表していますが、うちの学校は

学力としてはあまりいい結果ではありませんでしたが、しかし、それ以外の他のアンケートなんかを見ると、とても人間として輝くような項目はとても高かったんです。私達職員は、常々そういう大事にしようということでやってきました。学力だけがすべてではない。人間として豊かな人間を育てたい。そういうことで細々と今、やってきています。今年の結果はまだ見てないですけど、そんなに大きな変化はないかもしれません。でも、そういうことでそんなに動揺しないようにしようということです。いじめについても私達の基本的な認識は、私達がしっかり目を開けてしっかり見てれば、子どもたちのいじめは見つけられるとは残念ながら思えないです。私達の目の届かない、気がつかないところがいっぱい子どもたちの世界の中にある。そういうことで、私達は担任だけではなくて、学校にいるすべての職員、保健室とか図書館とかそういうところだけではなくて、用務員さんが学校の隅このほうで草をとってくれたり、植えてくれたり、そういうところの人も含めてすべていろんな角度から見える子どもたちの姿で「おかしいな...」「なんでだろう...」ということ職員会議の中で必ず1項目入れて、みんな話をするようにしています。担任の方もお互いが

当然、自分たちだけでカバーできる、そういう発想はもってないんです。だから、その気持ちを学校のなかだけではなくて、保護者の方や地域の方も含めていろんなところで私達の足りないものを聞きながら、どうしたらいいかということをお願いしてきましたし、これからもお願いしていきたいと思っています。それから、もうひとつ、私達自身もたくさんのプレッシャーをかけられています。子どもたちが格付けをされてきています。それは私達自身も格付けをされるプレッシャーのなかにさらされながら子どもに成果をあげる。子どもに目立つ成果をあげさせることによって自分自身の格付けを上げざるを得ないという、そういうプレッシャーをうけながらやっています。やはり私達自身もずっと持っている主体的に今、私達はこの仕事をして何をいちばん大切にしないといけないのか、ということをついつい目の前の忙しさで忘れそうになりますけど、できるだけ主体的な教育目標というものを私達自身が常に振り返りながら、上からの流れに流されないようにがんばっていかようと思います。そのときに堅苦しいことばかりではなしにユーモアのこころというのはとっても大事だと思います。(拍手)

会場からの発言 ② 一教師の集団がこわされている、まず正規の先生をふやすことを一

私は県会議員をしまして文教委員会という教育関係の委員会に入っています。今もお話をお聞きしながら、一つひとつ、文教委員会のなかの議論やら、今の教育の現実やらをうけとめて話を聞きました。そのなかで私は難波先生が、見えない先生、この先生のイライラ、ムカムカ、もてない子どもとの時間、見えない子どもの生活、というふうに言われていますが、ここのところを解決することが今、求められているのと思っています。それで、子どもたちに生きていくすばらしさとか、あなたはそこにいるだけで生きてきなんだよと、そういうことが見える先生の状況がどうかというのが今、問われているというふうに思っています。そのなかでふたつのことを言いたいのですが、ひとつは、先生自身の人権が守られているのか、というのです。今、ワーキング・プアというのが大問題になっていますが、実は、学校の先生というのは、そういう非常勤の先生方、定数内講師と言われる臨時の先生方というのは、昔からワーキング・プアなんです。いつ、採用されるだろうか。そして今度来年は大丈夫だろうか。定数内講師が来るだろうか。非常勤講師の口があるだろうか。40歳までに教師として雇ってもらえるだろうか。常に自分自身の自己肯定感、自己否定

とたたかいながら子ども達に向き合っておられるということだと思います。その先生方も非正規化というのがもう急激な勢いで、私は子どものいじめなどとほとんどカーブが同じように非正規化が起きているということを見ておかなければいけないと思います。さきほどアベ先生のほうから。「学校の中で一人ひとりの子ども達のこと、気になっていることを話し合っているんだ」と言われてとてもすばらしいなあと思ったのですが、実は非正規化がすすむと大きい学校の先生方はこう言われます。「どの人が保護者なのか。どの人が先生なのかわからない」と。もう非正規の先生がたくさんおられて、時間講師やいわゆる生活支援員やさまざまな職種の先生が増えていて、先生の集団自体がこわされている、ということをしっかり見ておかなければいけないと思います。もうひとつは学力テストです。昨日、結果が発表されて、私のところへも速達で送ってきました。その内容は新聞でも報道されているのですが、実は成績が去年も芳しくなかった。今年も芳しくないから、教育委員会が何をしようとしているのかということをおひとつだけご報告をして私の発言を終わります。実は2学期から小学校の算数と中学校の数学について単元ごとに「学習到達度確認テスト」を

やります。学校の先生方が子どもに、たとえば負の数とか正の数の授業を終えて、子ども達に試験をするときに教育委員会のホームページからダウンロードしてその試験をやります。15分ほどでできますが、これをやって入力しますと、県内平均と瞬時に比べられます。そういうシステムを導入することが決まっています。

会場からの発言 ③ —おはよう、といえない生徒、自己肯定感をなくむことが大切—

県内の高校に勤めています。それぞれの先生方の今考えていることをちょっとだけお話をさせていただきたいと思います。先ほどのいじめの関係なんですが、私も相談の担当をしております、不登校や、それからさまざまな問題をかかえた生徒達の相談に応じております。そのなかでいちばん感じておりますのは、自立した個をどう育てるか。主権者としての自立した個人をどう育てるかということを、今日の議論も重ねながら考えています。先ほどの13歳から傍観者が増えるという問題も、そういう自立した個を育てるということに私達が成功していないという数値ではないかと考えております。いじめの問題で言いますと、その自立した個の根底にあるのはやはり自分にたいする信頼、自己肯定感だと思うのですが、自己肯定感を崩すのがやはりいじめ体験だと生徒達の関わりのなかで考えています。こういう子がいました。その子は普段見ていると友達と仲良くやっていて、別に問題はまったく見られない子なんです、ある時、話をしますとは「自分はもう消えてしまいたい」というふうに言うんですね。それはなぜなの



かということと一緒に話をしますと、一緒に仲良く友達しているんだけど友達が信頼できないんですね。友達からも信頼されているというふうに思えないんです。なぜそうなのかなということはずっと話をしていきますと彼女の根底には小学校時代のいじめの体験がありました。そのいじめの体験だけならいいのですが、ある学年の時にいじめられる体験をして、そしてその次の学年にあがったときには、自分はほんとうにいじめはイヤだったんだけど、いじめる側にさせられたそうなんです。その子と一緒にいじめる側に立たないと

今、着々と準備をすすめ、たぶん、先生方も学期が終わっていかれるとこれに直面されると思います。ほんとうにこういうことでいいのかどうか、ということも含めて一応報告をしておきます。私自身はこんなことはやめてほしいし、何よりも、正規の先生を増やすべきだということではがんばっています。(拍手)

同じように自分がいじめられるという体験を過ごしてくるなかで、自分自身も信じられない。まわりの友達も信じられない。だから彼女の中の「自分は自分でいいんだ」というふうな思いが、やはりそのいじめ体験の中で崩されてきたんだなということを強く感じています。だから、そういう子は他にもいまして、激しいこういう子がいました。「先生、おはよう」と言えないっていうんですね。あいさつなんか私達も指導しますが「なぜおはようって言えないの?」と聞くと、「私が『おはよう』っていうと相手の人が『おはよう』って私に言われたら嫌かもしれない」と言うんですね。そこまで考えるんですね。「『おはよう』っていう『おはよう』と朝言ったら、みんな気持ちいいよ」って言ったら「でも、私に『おはよう』って言われたらいやかもしれん」という、そこまで自分を自分として認められない。そういう子に今、「まわりの子を信じて、自分を信じて、みんな、仲良くしましょう」と言ってもほんとうにそれはウソ事っていうか「みんなにこにこしているけど、ほんとうはそうじゃないんだよ」って言うのをこころの中に抱きながら、二重構造のように学校生活で人間関係を結んでるという実態があるように思います。だから不登校になってしまっている生徒達なんかほんとうに疲れるんですね。ほんとうに明るい子なんです、その子がどうして家でそんなに疲れるのかわからなかったんです。「土、日は疲れて家から一歩もでないんです」と保護者の方が言われるんです。なぜかという月曜から金曜まではものすごく演じているわけですね。自分を演じ続けるわけですから演劇の舞台にも5日間立っているわけですから土日は休みたい。そういう子が決して珍しくない。そういう中でほんとうに自分は自分であっていいんだ。立ち直って言った子や元気で働いている卒業生も私、何人か、関わりがあるのですが、「先生、私は私でいいんですね」と書いてくれ子。それから、ほんとうに元気になって、恋もして、結婚もして、子どもも生まれてというような嬉しい報告を聞いています。「私は私でいいんだなあ」という根底には、やっぱり自己肯定感をどう育てていくか、そのためにほんとうに「自

分は自分でいいんだ」と思えるような学校生活や、地域や家庭の生活を社会としてどう保障していくかというのが問われると思うんです。そういうのが破壊しているのか先ほどからお話がありました学力テストです

アンケート

回収されたアンケートは55通。内訳は教員23人、行政・教育委員会4人、市民16人、その他12人。少し概要を紹介してみます。

①いじめがあった時、教員は被害者、加害者、傍観者、それぞれにどうむきあう（よりそう）のか遠い目標、近い目標として、いじめの原因をなくしていく見通しは・・・こんなことを、もう少し整理していこうと思います。

②今までやっていることが、いじめを少なくすることにつながっている、と思えるものを、確かめていきたい。職場で弱味を含めて出しあえる関係づくりをすすめられる教員をめざしなさいと、呼びかけられた会になりました。

③教員、保護者だけでなく、様々な立場の方々からお話を聞くことができ、本当に学ぶものが多かったです。大変勉強になりました。ヒントになる事例ばかりでした。双方向的内容で有意義でした。

④「いじめられた子」は、ズタズタに心をひきさかれ、いじめに向き合っている。としても・・・「いじめた子」はいじめに向き合っていくだろうか。そのことを議論すると、単に「謝罪」から変な方向でたとえば「警察」「出席停止」「懲戒」などの権力的な方向・・・そうではなくて、いじめた子の側に育てるべき自己肯定感、他人との連帯感、感動と共感、そんな「育ち」を親は大人は育てるべきだと思った。

⑤いじめを数値で見てもなかなか本質は見えないと思う。ひとつひとつの事例、背景、経過に向き合うことのしんどさに逃げないで、取り組むことだと思う。それしか解決の方法はない。子どもを中心に親と先生が手を結ぶ。このことが大切だと感じる。先生を励ます親であってほしい。

⑥問題の所在と解決の方向性にかなり、はっきり出してくれたように思う。最後のパネラーの発言は、結局、

とか競争社会ですとか、さまざまなゆかんだ今の学校、それから教育社会の全体のあり方かなあというふうに思ったりしているところです。（拍手）

いじめ問題も今の日本の政治・社会問題へと、帰結するという。教員の関係の学び方、改めてこの問題の重要性が。

⑦教師として子どもたちに安心できる場を作るために、同僚性を高めていくために、自分は何ができるのか、とても考えた一日でした。

⑧子どもが心を開ける関係を作るのが大切だと思います。自己肯定感を育てるには一人ひとりをよく見て良さを伸ばすことが必要だと思います。日ごろからほめるということをしかりしていこうと思います。

⑨いじめでも、PTSDなどの心の傷が何年も何十年も残ることを知り、（あるだろうな～とは思っていたけれど、認識が甘かった）子どもたちから目をそむけてはいけないなあ。しっかり向き合っていきたいな。でもしんどいだろうか、はっきり「いじめ」がなくても、すでに毎日しんどいです。

⑩大人が「素晴らしい」と思う教師でも実は子どもをキズつけることばを自分では気づかずに言っていたりする。そんな弱さを誰でももっている。失敗は誰でもする可能性はある。その弱さでつながりあえることが大切なのだと思います。

⑪小学校の担任として「この子はもしかしていじめられているのでは?」というサインはどのようなものがあるのか知りたいです。

⑫不登校の子ども母親です。今中学3年生です・来春の高校について少しずつ話をしながらやっぱり将来の自分について悩んでいるみたいです。約5年間学校に行っていないので、いじめで学校へ行けなくなりました。

⑬イジメを傍観するしかない娘の悩みをいつも聞いて、どうしてやることも出来ない自分にふがいなさを感じています。

—— ななくさ 短信 ——

10月の利用者は23人になる予定。介護5の方も数人おられます。10月から利用されている方は、小規模がいい、食事もおいしい、訪問での食事づくりもとても気に入っていただいています。一方、急に入院したり、居宅では生活が無理になってきている独り暮らしの利用者の方もおられます。福祉、政治の貧困さを感じざるをえません。総選挙が取り沙汰されているなかで、ななくさ管理者の池田さんは、年金で入所できる施設を増やして欲しい、介護労働者の賃金を保障できる介護報酬の引き上げをして欲しい、と訴えています。